

美 伝統の手技

第十六回

職人の心意気を ガラスに吹き込んだ「江戸風鈴」に 篠原儀治さんが作り続ける 伝統の美を見た。

職人技は時代に翻弄される。今もて囃されていても、明日は衰退の憂き目を見る。一度すたれた技は蘇らない。そんな危機もあった時代を乗り越え、「江戸風鈴」は夏の音を響かせ続ける。



「切子風鈴」

本気になれ
真剣になれ
人間らしく生きて
時間の合計のみが
人間の年齢である

口玉を少し冷ましてから再び坩堝に差込み、本体用のガラスを巻きつけた後、一気に吹く。

「金ってえのは、女性とおんなじで、追っかければ逃げちゃう（笑）。だから、金儲けしたいと思っているうちはまだまだ、いい仕事はできねえな」
頭を覆うタオル地の鉢巻。襟元に江戸風鈴と染め抜かれた藍色の半纏を羽織った職人さんが、さりとてこう仰る。なるほど。
こういう人を当時は、粹でいなせ、と言ったんだろうなあ、きつと。で、失礼ですけど、おいくつなんですか？
「うん？ 今年の11月で87歳。こないだ病気したんで、医者に『もうそろそろ俺も潮時かね』って聞いたら、バカいっちゃいけねえ、あんたは100まで生きるよ、と叱られちゃったよ。ガハハハ」
そう豪快に笑うのが、風鈴を作つてこの道73年、という篠原風鈴本舗二代目の篠原儀治さんだ。実は、篠原さん、「江戸風鈴」の名付け親でもある。
「それまではガラス風鈴もビードロ風鈴も一緒に呼ばれていて、キチンとした呼び名がなくてね。だったら自分で付けちまえ、と」
それが昭和30年代後半のこと。つまり「江戸風鈴」は篠原一門だけが名乗れるオリジナルブランドというわけなのだ。
江戸風鈴はいずれもガラス製で、内側から絵を描くことに加え、鳴り口をギザギザにしてあるのが特徴だ。
「そうすると振り管と触れ合ったときの音が不思議と柔らかくなる。そこがいいんだね」
また、長いガラス管の先に溶かしたガラスの塊を付け、息を吹き込んで一気に膨らませ、ガラス玉を成型する昔ながらの「宙吹き」という技法を用いるのも江戸風鈴ならではの。篠原さんは半世紀以上の人生の大半を1300度を超える炉と向き合い、ガラス玉を吹き続けてきた。

11人兄弟の長男として生まれた篠原さんが、この世界に飛び込んだのは14歳の時。
「親父が風鈴屋をやっていたんだけど、俺は跡を継ぐ気なんてさらさらなかった。だから親父に、日本で一番のガラス職人を連れてきたら跡を継ぐよって言ったんだ」
この発言からして、当時の儀治少年のヤンチャぶりが目に浮かぶようだが、驚くなかれ、しばらくして父が関西から連れてきたのが名人・吉村清吉さんだった。吉村さんの卓越した技術は評判どおり、他の職人たちを嫉妬させるほどだったというが、
「ただ、とにかく気難しい変わり者でねえ。風鈴は玉取りといって小さな玉を作る口玉職人と、もう一度ガラスを巻き取って膨らませる本職の二人が組んで仕事をすんだけど、俺が何度口玉を作つても、清吉はそれを黙って切り落としちゃう。俺も14歳でいっぱしの職人気取りだったからね、何がきにくわねえんだ、チクシヨ」と、しよつちゅう食って掛かったもんだよ」

口玉の山を前に苦虫を噛み潰す父。訳が判らずイラ立つ息子。そんな二人を尻目に吉村さんは「俺の目を見れば答えはわかるだろ？」とばかり、無言のまま口玉を切り落とす。篠原さん、考えに考えた。そして、思案の末、吹き方を一つひとつ変えてみた。
「風鈴のガラスは厚さで音にも違いが出てくる。だから自分なりに考えて先のほうを厚くしたり、逆に元を厚くしたりして、色々試してみたらだね」
すると、どうだろう。吉村さんが、手渡された口玉を受け取ると、フツと息を吹き込んだのだ。篠原さんは60数年たった今でも、その日のことが忘れられないという。

「だからって言うわけじゃないけど、自分の仕事を自慢する職人に、いいものを作れる人はいないね。職人は言葉じゃない。だつて仕事を見れば、一目で善し悪しがわかるんだから」
風鈴職人として、それこそ「山あり谷あり」の人生を経てきた篠原さんだが、大きな谷のひとつが昭和50年代以降の風鈴需要の激減だった。

「要は住宅事情が変わつて、風鈴なんてうるせえ」という時代になった。で、俺としちゃ、冗

日本一のガラス職人に叩き込まれた 職人の心意気



【作業工程】

⑤成型 冷えたら、口玉を切り落として砥石で鳴り口を仕上げ上げる。ただ、このとき、あえてギザギザを残す。そのほうがきれいな音が出るからだ。



本体と口玉のつなぎ目を軽く叩いて口玉を落とす。口玉を落としたら、鳴り口の部分のギザギザを残しながら研ぐ。



共棒から切り落とされた口玉。ガラスの厚さ、玉の大きさ、切り口の具合ですべて「意識して大きさを変えている」のだとか。わずか1gの差が、微妙な音質も微妙に変わる。一見、同じサイズに見えるが本体はすべて「意識して大きさを変えている」のだとか。わずか1gの差が、微妙な音色の違いを生み出す。

⑥絵付け 墨で描いた下絵に色を付けていく。雨風にさらされることを想定して、江戸風鈴は顔料をニカワで溶いた絵の具を使い、風鈴の内側から絵を描く。



雨風に負けないため内側から絵を描くのも、江戸風鈴ならではの。絵の具の原料は、ニカワと顔料を混ぜたもの。色にはそれぞれ意味があるという。

⑦完成 本体に糸を通し、ガラス製の舌と短冊を付けて完成。



逆転の発想!? 羽根が風を受けると、鳴り出す「遊び玉」。竹スタンドに入った置き型の風鈴。「写楽」「アラビアンナイト」「古都」

①窯入れ 原料となるガラスを細かく砕いて炉で溶かす。炉は電気式で、坩堝の内側は摂氏1300度を超える。



右はガラスを溶かす専用の炉。中には素焼きの坩堝(るつぽ)が2つ埋め込まれている。江戸風鈴は薄手のため、ガラスが早く固まりやすい。ガラスが固まる前に成型を行なうため、窯場には2人1組で立つ。

②口玉作り 共棒と呼ばれるガラス棒に溶かしたガラスを巻きとり、まずは小さな「口玉」を作る。この口玉の部分は最後に切り落とされ、風鈴の鳴り口になる。



③穴通し ガラス棒の内側から金串を通し先端に穴を開け、風鈴をぶら下げための糸を通す穴を作る。



④宙吹き 口玉の上にさらに溶けたガラスを巻きつけ、ひと息で本体部分に空気を入れる。



型を使わずに昔ながらの宙吹きという技法を使うのも、江戸風鈴の特徴だ。宙吹きに要する時間は、たったの3秒。まさに瞬間の勝負だ。

「江戸風鈴」ってえ名付け親は俺なんだよ



「風鈴は芸術品になっちゃダメ。野暮ったくて垢抜けないのがいんだよ」と篠原さん。

篠原儀治
Sinohara Yoshiharu
1924(大正13)年生まれ。昭和12年、14歳のときに「職人に学問はいらない!」という父・又平氏(初代)より跡継ぎを命じられるが、それに反発。父に内緒で夜学の商業高校を受験し、昼間は仕事、夜は夜学に通いながら卒業。昭和19年、戦火の激化とともに徴兵により戦地へ。中国で終戦を迎える。復員後はコップやビン作りを足がかりに昭和23年、風鈴作りを再開。昭和30年、「ほおずき市とくつついちまえ!」との考えから、当時ほおずきの産地だった江戸川区内に工房を構える。後に自身が作る風鈴を「江戸風鈴」と命名。昭和50年代に入ると住宅事情の変化により、需要が激減。同業者が次々に廃業していく中、「ピンチは最大のチャンス!」とばかり海外に目を向け各地を回る。欧米では「エド・ウィンドベル」「エド・ウィンドチャイム」としてマスコミで話題になる。平成16年名誉都民の称号を授与。東京都優秀技能賞受賞、江戸川区無形文化財保持者。
篠原風鈴本舗:東京都江戸川区南篠崎4-22-5
TEL:03-3670-2512
<http://www.edofurin.com/>



孫娘の由香利さん(左)と、現在「篠原風鈴本舗」の代表を務める3代目の裕さん。

談じゃねえ、日本がダメなら外国があらあ、と……」
一念発起した篠原さんは風鈴を携えて欧米へ渡り、異国の路上で風鈴の音を響かせた。するとそれが評判になりマスコミの取材が殺到。
「ただね、むこうには音を楽しむという風習がないから、赤色は魔除け、黄色が金運、緑が健康とそれぞれの色に意味をつけたら、それが話題になってね。アメリカではホームレスも買っていったし、ロッキーマウンテンジャインディアンにも喜ばれたねえ」
ネイティブ・アメリカンの暮らす大地に鳴り響く風鈴の音、とはなんとも壮大な感じがするが、ともあれ篠原さんが20年間で訪れたのは、30か国以上。平成16年には「江戸の伝統を守り、日本の伝統工芸を海外に広めた」等の理由で東京都知事より名誉都民の称号が授与された。ご自身は、「最初、なにか新手法の詐欺じゃないかと思ったよ」と笑うが、風鈴作り際に際し、一貫して変わることがなかったのが、「風鈴は芸術品になっちゃダメ。野暮ったくて垢抜けないところに良さがある」つまり高級品で

はなく、庶民が郷愁を感じてくれるものこそ風鈴、という思いだ。
「昨年、病を患ったこともあり、現在は長男・裕さんが篠原風鈴本舗の大黒柱として技を継承しているが、
「二人の息子とも跡を継いでくれたし、孫娘二人もこの道に進んでくれた。ほんと、自分の技術を継承してくれるのはうれしだね。跡継ぎは女でもいいかって? 江戸時代には女の風鈴職人もいたからね」
職人の息で膨らんだガラス玉が風鈴になって風に揺れ、その風が再び流れていく。目に見えない風を音に変え、それを楽しむ遊び心。チリンチリン〜。
工房の軒先に吊るされた風鈴が風に揺れた。
日本の夏の、音がした。



篠原さんの自筆の銘。この言葉が、チャレンジ精神の源になっている。